

平尾山古墳群

— 関西電力御坊幹線鉄塔建設工事に伴う —

1983年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

柏原市は大阪府の東南部に位置し、古代の帝都を有した奈良盆地を後背地として、貴重な多くの文化遺産と美しい自然に恵まれています。

柏原市内にある文化遺産は、日本の歴史や文化を知る上で非常に大切な資料です。これらの中には、国から重要文化財の指定を受けているものだけでなく、古代の住居跡や小さな古墳、生活の有り様を物語る民俗資料等色々あります。

近年は都市機能の高度化および社会生活の向上などにより、電気エネルギーに対する需要が増加して来ています。関西電力株式会社では、これに対処するため、発電所の新增設および送変電設備の増強拡充等をはかり、安定した電力供給に努められており、和歌山県御坊市に新設された御坊発電所もこの計画の一環です。

和歌山県御坊発電所から信貴変電所まで送電するために、253基の鉄塔建設をしなくてはなりません。この建設は、現代の豊かな生活を維持するためには必要なものです。しかし、私達の祖先の生活文化の足跡は、ひとたび破壊すれば、ふたたび得ることのできない貴重なものです。今日まで継承してきた文化遺産を後世に残しつつ、更に新しい文化創造をはかることが望ましいものです。今回の発掘調査の結果、祖先の文化遺産を破壊し、消滅させることなく、保存しつつ、現代文化の根幹を支えるものといえる送電用鉄塔の建設ができたことは、開発か、保存かという短絡的な択一思考が横行する現状の中で、非常な困難をともないながらも努力すれば、共存が可能となるひとつの指針を示すものと考えます。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が関西電力株式会社中央送変電事務所、所長 長濱一郎より調査依頼を受け、同社の和歌山御坊発電所から、柏原市雁多尾畑に位置する信貴変電所に至る253基の鉄塔建設のうち、柏原市内での7基の鉄塔建設予定地における埋蔵文化財の緊急事前発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査および整理は柏原市教育委員会 竹下賢、安村俊史を担当者として昭和57年4月10日より着手し、昭和57年8月31日をもって終了した。
3. 実測図中に表示した方位は磁北であり、標高は東京ポイントを用いた。
4. 本書の執筆は竹下 賢、安村俊史が担当し、大塚淳子、米谷厚子の協力を得た。記載順は鉄塔No 253 からはじめ、No 247 でおえるものである。
5. 調査参加者は次のとおりである。寒暑にかかわらず熱心に協力いただいた点、記して謝意を表すものである。

北野 重	花田勝広	広岡 勉	山内 都	西原清美	松岡由紀子
刈野絹子					
佐藤 尚	山中 茂	井宮好彦	上條裕典	石田成年	山下祐司
坂井利和	鐵 英記	前田佳久			
竹下典江	竹下彰子	藤岡弘子	蜂谷直子	横尾明美	中村仁美
甲斐美恵子	村口ゆき子	飯村邦子	大谷麻弓	柏尾スミ子	森山美代子
原田久美子					
奥野 清	道籠甚藏	井上岩次郎	森口喜信	谷口鉄治	岸本重夫
麻栄三郎	川端長三郎	朝田行雄	山田貞一		

目 次

はしがき

例 言

1. 調査に至る経過	2
2. 鉄塔No 253 の調査	3
3. 鉄塔No 252 の調査	13
4. 鉄塔No 251 の調査	14
5. 鉄塔No 250 の調査	17
6. 鉄塔No 249 の調査	24
7. 鉄塔No 248 の調査	25
8. 鉄塔No 247 の調査	27

挿 図 目 次

図-1 調査区位置図	1
図-2 鉄塔No 253 平板測量図	3
図-3 鉄塔No 253 D脚落ち込み内出土馬具紋具、刀子実測図	4
図-4 鉄塔No 253 雁多尾烟 6 支群13号墳横穴式石室実測図	5 ~ 6
図-5 鉄塔No 253 雁多尾烟 6 支群13号墳測量図	7
図-6 鉄塔No 253 雁多尾烟 6 支群13号墳石室内出土かんざし実測図	8
図-7 鉄塔No 253 出土上器実測図	9
図-8 鉄塔No 253 雁多尾烟 6 支群13号墳石室内出土鉄釘実測図	11
図-9 鉄塔No 253 雁多尾烟 6 支群13号墳石室内出土鉄釘実測図	12
図-10 鉄塔No 252 平板測量図	13
図-11 鉄塔No 251 雁多尾烟43支群 8 , 9 号墳位置図	14
図-12 鉄塔No 251 雁多尾烟43支群 8 , 9 号墳墳丘測量図	16
図-13 鉄塔No 251 平板測量図	18
図-14 鉄塔No 250 雁多尾烟45支群 3 , 4 号墳位置図	19
図-15 鉄塔No 250 雁多尾烟45支群 3 号墳石室内出土鉄釘実測図	20
図-16 鉄塔No 250 雁多尾烟45支群 3 号墳石室内出土土師器実測図	20

図-17	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3号墳横穴式石室実測図	21~22
図-18	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3,4号墳測量図	23
図-19	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3号墳周溝断面図	23
図-20	鉄塔No.249	平板測量図	24
図-21	鉄塔No.248	平板測量図	26
図-22	鉄塔No.247	平板測量図	27

図 版 目 次

図版1	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳墳丘復元状況
図版2	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室排水溝, 横穴式石室入口
図版3	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内
図版4	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室奥壁, 横穴式石室西壁
図版5	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳石室内遺物出土状況, 石室内排水溝
図版6	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内出土須恵器, かんざし, D脚落ち込み内出土馬具紋具・刀子
図版7	鉄塔No.253	出土土器
図版8	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳石室内出土鉄釘
図版9	鉄塔No.253	雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内出土鉄釘, 鏡
図版10	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3号墳全景, 埋め戻し状況
図版11	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3号墳横穴式石室, 横穴式石室奥壁
図版12	鉄塔No.250	雁多尾畠45支群3号墳横穴式石室東壁, 周溝
図版13	鉄塔No.248	遺構検出状況東西トレンチ掘り下げ状況

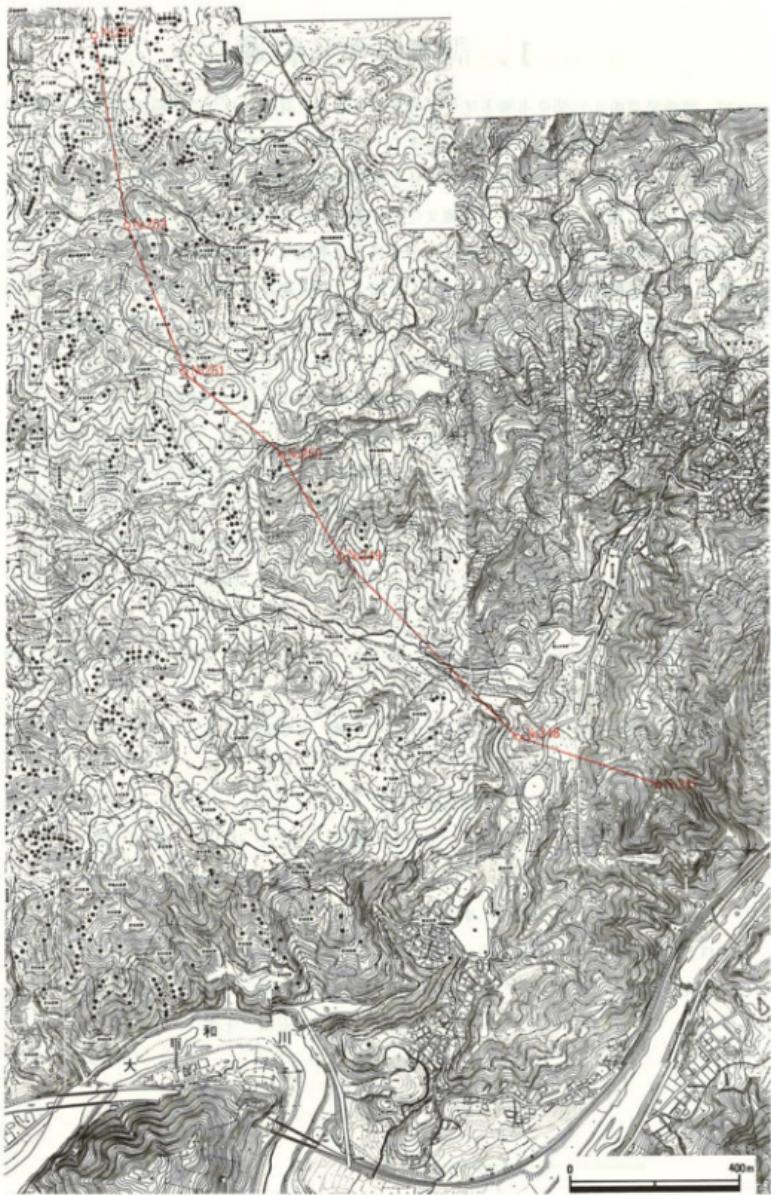


図-1 調査区位置図

1. 調査に至る経過

今回、鶴坊発電所より柏原市雁多尾畑に所在する信貴変電所にいたる送電用鉄塔253基の建設予定地の内、柏原市内建設分7基は、全国でも有数の古墳密集地域である平尾山古墳群内に当たる。この点を重視した関西電力株式会社では建設用地選定に関して、事前に幾度となく府市文化財担当者に踏査を依頼して、埋蔵文化財に直接的被害を与えないよう配慮されていた。

柏原市教育委員会は関西電力株式会社 中央送変電事務所 用地課との事前協議の結果、「発掘調査により予定地に古墳の存在が確認された場合、鉄塔建設予定地を他所に変更すること。」を前提とし、発掘調査に関する覚え書を交し、昭和57年4月から8月末日の間を調査期間として、調査費8,737,000円をもって調査にあたることになった。

柏原市教育委員会では、鉄塔建設予定地の全体計画自体が平尾山古墳群内であることから、発掘調査の主眼を古墳、およびそれに関連する遺構の検出においていた。鉄塔の脚部に該当する地点に試掘溝を設定し、遺構の検出に努めた。発掘調査は建設予定地の買収交渉と併行する形で実施せざるを得なかったため、鉄塔建設予定地が葡萄畑にあたるところでは収穫との関連で、調査時期が前後したこともあるが、土地所有者の方々の寛容な御配慮と関西電力株式会社 中央送変電建設事務所 用地課の担当諸氏の努力により、予定の期間内に終了することができた。

今回の調査にあたり、下記方々には、色々ひとかたならぬ御支援を賜った。記して謝意に換えるものである。

大阪府教育委員会文化財保護課 大野 薫 松岡 良憲 田中 和宏

横本 哲 岩崎 二郎

関西電力株式会社 中央送変電事務所

用地課 永尾 隆保 竹本 利一 中川 修一

森実 剛

送変工事課 竹村 茂夫

株式会社 愛工社 大阪支店 後藤 守男

土地所有者 巴波 清 安尾 寿 高見 勝

奥野 清 安田 生治 山口 丈張

横尾 友二 (敬称略)

2. 鉄塔No. 253 の調査 (雁多尾畠6支群)

当初の発掘調査計画は協議の結果、建設予定地に繁茂する樹木の伐採の後、鉄塔建設の脚部をはずして、トレンチを設定することとなっていた。また、鉄塔建設を関西電力株式会社から委託された株式会社 愛工社から作業員の提供を受けることとなっていたが、実際に掘削にかかった時点で、発掘調査の経験のない作業員では、遺構、遺物の検出に関して破壊の危険が伴うことが判明し、再度協議により、柏原市教育委員会の国庫補助事業遂行のための発掘調査に常時従事している作業員で調査をすすめることにした。また、トレンチ設定位置は鉄塔の脚部にあたる部分に変更した。

A脚、C脚建設予定地点に幅1m、長さ3mのトレンチを設定した。表土直下が、花崗岩の

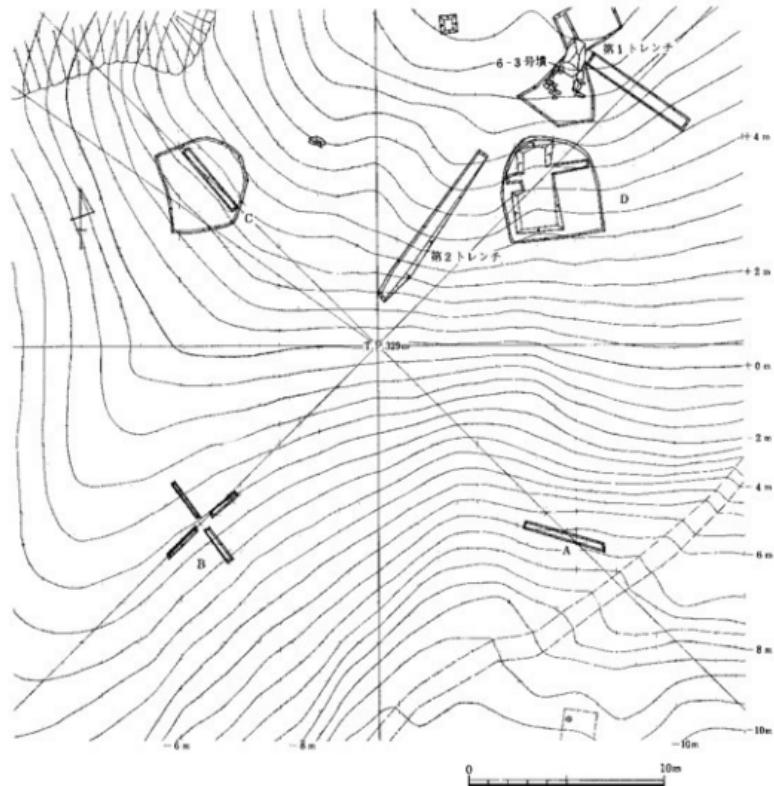


図-2 No.253 平板測量図

露瀬土壤であり、地山と考えられ、遺構、遺物の遺存は認められなかった。B脚については十文字のトレンチを設定してみたが、全く遺構と認められるものは、検出されなかった。D脚については、南北にトレンチを設定したところ溝状の落ち込みが確認され、落ち込みの最下部から土師器の丸底壺（H-5）と鉄製の馬具絞具、銅製の刀子が出土した。この落ち込みはこのトレンチ上部に位置する雁多尾畠6支群3号墳に続く墓道と考えられ、脚予定部を全面掘り下げたが、新知見は得られなかった。

雁多尾畠6支群3号墳

墳丘の封土は既に流出しており、石室天井石の一部が露出した状況であった。墓道との関連でみた場合、漢道部入口は完全に封鎖されているため、石室内の調査は保存上必要のないものと認めた。墳丘の規模を知るため、また周溝の有無を確認する目的で、石室外に長軸に直交する方向に第1トレンチを設定した。西側、東側共に石室構築時の掘り方が確認されたにとどまり、東側斜面については、石室から6mもの長いトレンチを掘開したが周溝を確認しえなかった。このため、この古墳の墳丘規模を明確に把握できなかったが、石室天井石の露出部中央点および、D脚で検出された墓道の比高差等より考えると、直径12~14mの数値を有する円墳と考えられる。

D脚トレンチの西側、6支群3号墳から南西に延びる小陵線上に幅0.5m、長さ9mの第2トレンチを設定した。表土層下は地山の花崗岩の礫瀬土。このトレンチ掘開土の中から土師器の小型丸底壺2点（H-9・10）と杯3点（H-6~8）が出土した。墓道等の遺構は検出されなかったが、これらの土師器については、平尾山古墳群中において、まま認められる墳丘に埋置された供獻土器と考えられる。

雁多尾畠6支群13号墳

A脚の南側に雁多尾畠6支群13号墳が開口して存している。漢道部天井石が削落し、側壁石の一部は抜き取られている状況であったので、墳丘、石室の規模を確認するために調査を実施した。

1. 石室

漢道部に削落している石室用材を除去したところ、漢道部中央、主軸に沿って、石組みの排水溝の存在が確認された。玄室部は天井石の表面が地下水の凍結により一部剥落していることが認められたが、ほぼ構築時の原況を保つものである。

石室の規模については、玄室、右側壁長4.36m、左側壁長4.43m、中央長4.39m、玄門部幅2.08m、奥壁部幅2.03m、高さ、玄門部1.69m、奥壁部1.85m、漢道部幅、玄門部にて1.34m

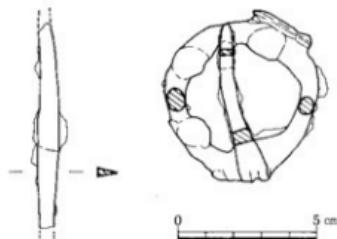
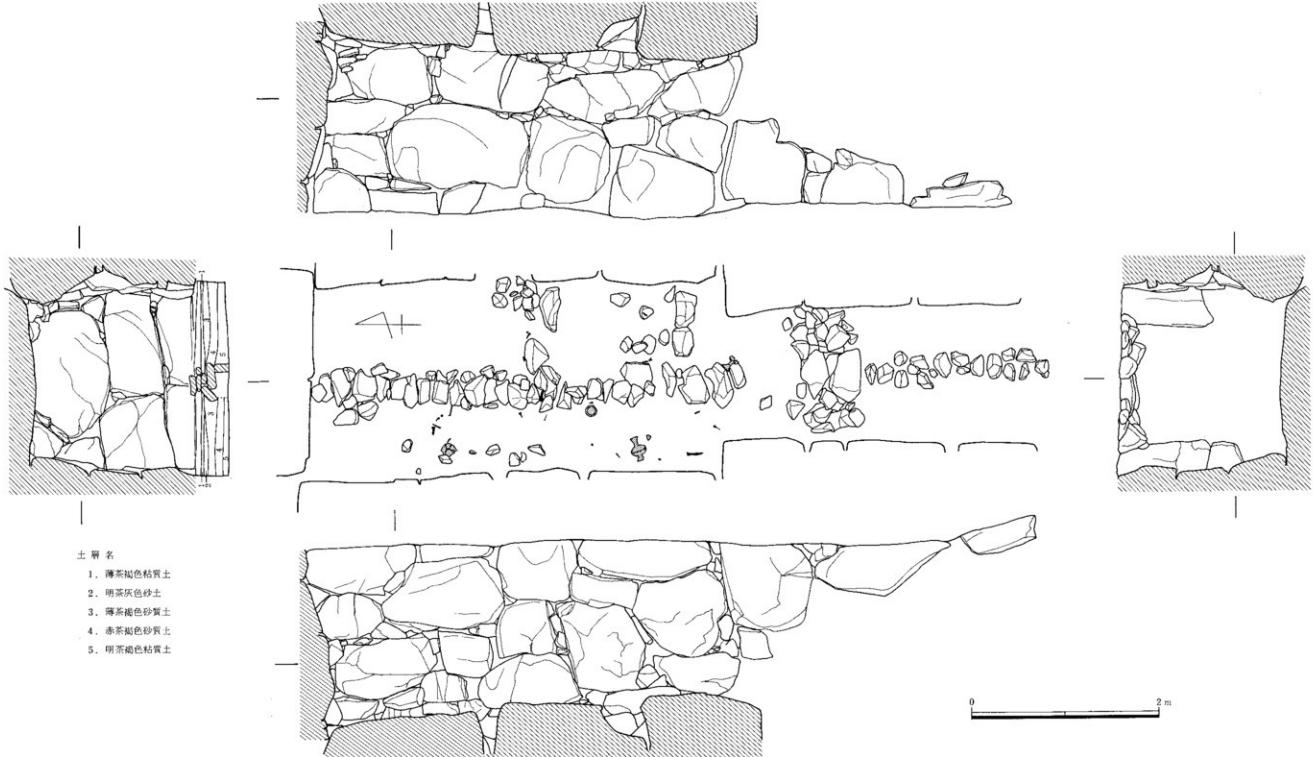


図-3 D脚落込み内出土馬具絞具、
刀子実測図



圖—4 蘭多尾細6支線13號古墳橫六式石室測量圖

羨道部長については、排水溝の長さより、ほぼ8mの数値を計測した。石室の長軸中心線は、北6度東をしめしていた。

石室の構築には、生駒山地に産出される花崗岩の自然石を用材として使用している。石材間に生じた間隙には、小割石を充填して調整している。

石室の構築については、地山に石室と羨道を含む掘り方を設定し、石室を構築し、次いで羨道を築いたように観察された。

石室の構築順序は、掘り方終了後 最初に奥壁一段目を立て、次いで、右側壁の一段目を奥から並べ立てて玄室長を決定した後、高さを整えながら二段目を奥壁から玄門に順次構築している。左壁は、右壁に対応する位置に玄門部の石を置いた後、一段目を奥壁にむかって並べ立てて行き、奥壁との間にできた間隙には小割石をもって充填し、調整している。二段目も同様の手順で構築しているが、一部千鳥式の部位も認められる。玄室の天井石は3枚で、天井高は奥から玄門にむかって低くなっている。

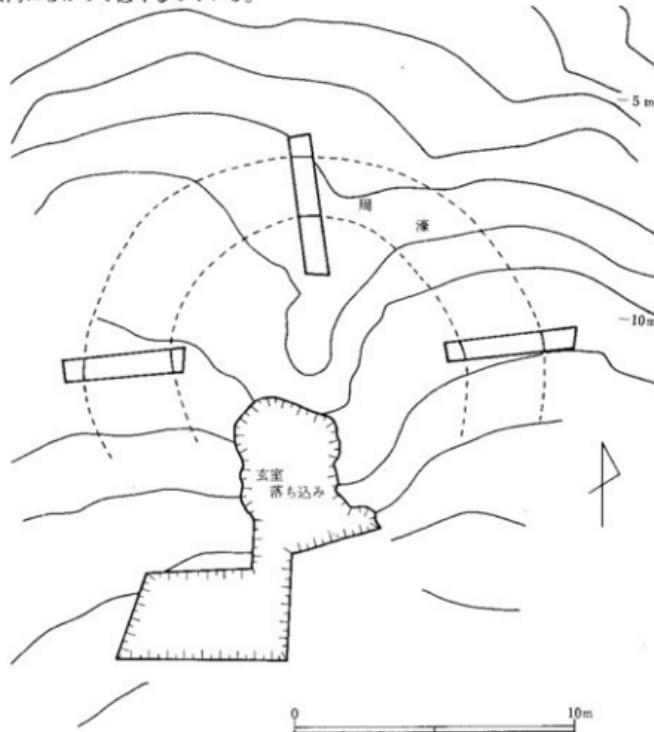


図-5 雁多尾畠6支群13号墳測量図（基準高T.P.329.0m）

石室の床面検出時に、石室長軸中心線に沿って石組み排水施設が検出された。床面に幅30~40cmの溝を掘り、厚さ10cm内外の側石を左右に立て、上に蓋石を置くもので、溝底には何等の施設もなされておらず、排水溝内はわずかに砂の流入が認められたのみで空間が残されていた。

石室内における埋葬施設としては、排水溝を中心にして左右に各々一基の木棺を埋葬したものである。排水溝の右に設置された棺については、自然石の上面に鉄釘が検出されたことから棺台にこの石を使用していたものと認められる。また、鉄釘の検出状況から木棺の大きさは長さ300cm、小口幅90cmの数値を考えることができる。かんざしが奥壁に近い地点で出土したことから、被葬者は頭部を奥に埋葬されていたことが推察される。排水溝の左に設置された棺については、棺台の存したことは明確でないが、ごぶし大の石の敷布が認められるので、これを棺台とみることは可能である。木棺の大きさは鉄釘の検出状況からみて、右側に設置されたものと同様と考えられる。この二棺の埋葬時期の前後関係については、右側の棺に伴う時期を明確に示す遺物が認められないため、推察の域をでないが、右棺に伴うとみられるかんざしと、左棺に伴うとみられる脚付長頭壺、及び高杯の脚部を削って杯身としている須恵器の比較からすると、右棺の埋葬が先行するものであろう。

墳丘の裾部、東西、及び北側に、幅0.6m、長さ5mのトレンチを設定、周濠の検出を図った。上幅約3m、深さ0.6mを計測する周濠が検出された。北から南に延びる小尾根の北側および東側、西側に確認され、狭道部前庭には調査範囲内では周濠の存在は確認されなかったことは、墳丘を区画するために馬蹄形に濠が穿たれていたと考えられる。周濠底の計測値からみて同濠の最大径は14m内外のものと認められる。

2. 遺物出土状況

石室が開口していたことから、遺物の遺存は期待されなかつたが、石室床面から須恵器、土師器、鉄釘が出土。また、石室中心線より右の奥壁側の床面上よりかんざしの出土があったが、木の髭根と見間違え、出土地点から動かしてしまった失敗があった。石室内の調査に対し十分な、照明設備の準備を怠った点は、調査担当者として、大いに反省するものである。

3. 出土遺物

須恵器（S-1~3）は、左側の木棺に伴う副葬品とみられる。S-1は、有蓋高杯の杯と柱状部との接続部分を丁寧に削り取って、転用した杯身である。S-2は、長脚2段のスカシ孔を有する高杯。スカシ孔は3方向から開けており、不整形。S-3は、脚付長頭壺。不整形のスカシ孔を1段2方向から穿つ。共に時期は7世紀初頭に位置づけられよう。

かんざしは、右側の木棺に伴うものとみられる。直徑0.2cmの銅製の棒を2つに折り曲げ、頭部は叩いて扁平にしている。全長は6.8cm。上から金を

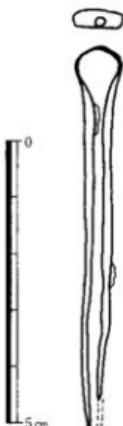


図-6
櫛多尾塚6支群13
号墳石室内出土か
んざし実測図

貼り付けていた痕跡が残る。頭部には装飾品を付けるためのものとみられる小孔を穿つ。

鉄釘は、30点出土した。そのうち頭部の残存するのは15点で、すべて扁平な円形状を成す。大型のもの（1・2）と小型のもの（5～16）、その中間の大きさと思われるもの（3・17）がある。木目の残存状態から、棺材の厚さは、2.5cm前後と考えられる。また、大型の鉄釘は左側の木棺に伴うとみられ、他の鉄釘に比べ、大型で、本数も少ないとから、木棺の組み立て以外の用途に使われた可能性もある。他に断面長方形の鎧の先端部が1点出土している。

土師器（H-1～4）は、排水溝の蓋石の上に点在して出土。すべて杯である。口縁部近くまで指オサエを施し、H-4は、断面三角形の高台をもつ。内面に煤の附着するものもあり、灯火器として用いられた可能性もある。共に8世紀初頭頃のものか。

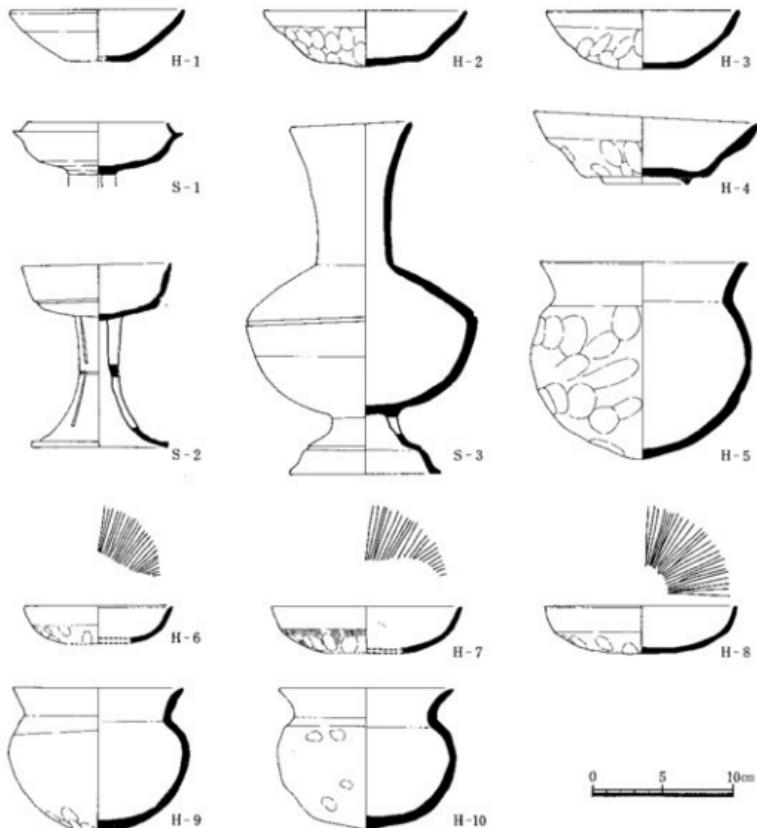


図-7 No.253 出土土器実測図

No.253 出土土器觀察表

番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H-1	6-13号墳 石室内	杯	口径 残存器高 12.3 3.7	平らな底部から斜め上方に直線的にひろがる体部がつづく。口縁端部は上方にやや尖り気味。	外面 底部から体部は指オサエ。口縁部は横ナデ。 内面 体部から口縁部は丁寧な横ナデ。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 良好
H-3	6-13号墳 石室内	杯	口径 器高 13.7 4.2	平らな底部から斜め上方に直線的にひろがる体部がつづく。口縁端部は丸くおさめる。	外面 底部から体部は指オサエ。口縁部は横ナデ。 内面 体部はナデ調整。 体部から口縁部は丁寧な横ナデ。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 良好
H-2	6-13号墳 石室内	杯	口径 器高 14.5 4.0	やや丸味をもつ底部から外上方へ内寄気味に口縁部がつづく。口縁端部は丸くおさめる。	外面 底部から口縁部ちかくまで指オサエ。 口縁部は横ナデ。 内面 底部は指オサエ。 体部から口縁部は横ナデ。	色調 赤褐色 胎土 砂粒少脂含む。 焼成 良好
H-4	6-13号墳 石室内	杯	口径 器高 15.8 4.8 底径 5.9	平底に断面三角形の合台をもつ。斜め上方に直線的にひろがる体部から口縁部がつづく。口縁端部は丸くおさめる。	外面 底部から体部にかけて指オサエ。高台のまわり及び口縁部は横ナデ。	色調 赤褐色 胎土 砂粒少脂含む。 焼成 良好 内面 に墨跡有。
H-5	D脚落ち込み 丸底壺	口縁 腹径 底径 14.6 15.7 14.1	やや尖り気味の丸底から中位で頸りをもつ体部がつづく。外反する口縁部の端部は平らである。	外面 底部から体部までで指オサエ。口縁部は横ナデ。 内面 志部に一部ヘラ灰の工具痕のこゝ。 体部に接ナデ。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 良好 内面 口縁部から底部にかけて黒斑がある。	
H-6	第2トレンチ	杯	口径 残存器高 10.5 2.7	外上方へ内寄したがら立ち上がる体部から口縁部がつづく。口縁端部は内側におさめる。	外面 底部から体部にかけて指オサエ。口縁部は横ナデ。 内面 全面に横ナデ。 正反射暗文を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良、器身多く含む。 焼成 良好
H-7	第2トレンチ	杯	口径 残存器高 13.5 3.3	外上方へ内寄しながら立ち上がる体部から口縁部がつづく。口縁端部は丸くおさめる。	外面 志部は指オサエののち一部収納ナデ。 体部は指オサエののち細かいハケ日。 内面 全面に横ナデ。 正反射暗文を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 良好
H-8	第2トレンチ	杯	口径 器高 13.6 3.4	底部から外上方へ内寄しながら立ち上がる体部がつづく。口縁端部外間にやや肥厚。	外面 底部は指オサエ。 体部および口縁部は横ナデ。 内面 全面に横ナデ。 正反射暗文を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 良好
H-9	第2トレンチ	小型 丸底壺	口径 腹径 器高 11.9 12.8 10.3	丸底に球形の体部がつづく。「く」の字に外反する口縁部の端部を丸くおさめる。	外面 志部は指細田底一部のこゝ。底部から体部までナデ調整。 口縁部は横ナデ。 底部、体部はナデ。 口縁部は横ナデ。 内面	色調 褐色 胎土 精良 焼成 良好 内面 黒斑あり。
H-10	第2トレンチ	小型 丸底壺	口径 腹径 器高 12.4 12.7 10.1	丸底にやや緩平な球形の体部がつづく。外反する口縁部の端部はやや尖り気味。	外面 底部から体部まで指オサエ。 口縁部は横ナデ。 内面 底部、体部はナデ調整。 口縁部は横ナデ。	色調 褐色 胎土 精良 焼成 良好 内面 黒斑あり。
S-1	6-13号墳 石室内	有蓋高杯	口径 支承径 残存器高 9.9 12.1 3.8	浅く平らな底部からやや内寄する体部がつづく。受部は水平に窪みのび端部は丸い。たもあがりは内傾してのび端部は丸い。	外面 底部は回転ヘラケズリ、体部から口縁部まで回転ナデ。 内面 全面回転ナデ。	色調 淡赤色 胎土 砂粒少脂含む。 焼成 型輪 内面 二次転用
S-2	6-13号墳 石室内	高杯	口径 脚径 器高 10.6 9.7 13.0	杯部はやや平らな底部から体部が外上方へ内寄しながら立ち上がる。口縁端部は尖り氣味。下位に一束の沈線を施す。 脚部は2段に3方向からのスカシ孔をもつ。中位に一束の沈線をめぐらす。	外側 面輪ナデ。	色調 淡赤色 胎土 砂粒少脂含む。 焼成 型輪 内面 外側 面輪ナデ。
S-3	6-13号墳 石室内	脚付 長颈壺	口径 腹径 脚径 器高 8.4 16.4 10.7 24.9	底部から体部が外上方に内寄しながら立ち上がり、肩部で鉛垂して内縮する。屈曲する位置に一束の沈線をめぐらす。外立する頸部がつづき、口縁端部は丸くおさめる。脚部は下外方に外寄しながらひろがり、中位で鉛垂して下方にのびる。壺部は平らにわわる。2方向からのスカシ孔をもつ。	外側 底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 内面 全面に回転ナデ。	色調 伝色 胎土 砂粒少脂含む。 焼成 型輪 内面 伝色 胎土 砂粒少脂含む。

雁多尾煙6支群13号墳石室内出土鉄釘法量表

(cm)

番号	現存長	断面	頭部径	番号	現存長	断面	頭部径
1	19.7	1.1×1.15	3.5×3.3	17	推定現存値 8.9	0.6×0.7	2.5×2.3
2	16.7	1.2×1.4	3.3×2.9	18	6.9	0.5×0.5	欠損の為不明
3	14.1	0.7×0.7	欠損の為不明	19	6.8	0.7×0.7	欠損の為不明
4	6.7	1.25×1.4	欠損の為不明	20	3.1	0.6×0.6	欠損の為不明
5	0.4	—	1.65×1.5	21	3.2	0.6×0.7	欠損の為不明
6	0.7	—	1.3×1.4	22	4.5	0.5×0.5	欠損の為不明
7	1.1	0.4×0.6	1.5×1.4	23	推定現存値 4.9	0.5×0.6	欠損の為不明
8	1.7	0.6×0.7	1.5×1.4	24	5.4	0.5×0.5	欠損の為不明
9	2.7	0.3×0.4	1.4×1.35	25	1.8	0.3×0.2	欠損の為不明
10	2.9	0.5×0.6	1.4×1.1	26	4.6	0.45×0.45	欠損の為不明
11	2.5	0.6×0.6	1.3×1.2	27	推定現存値 4.9	0.5×0.5	欠損の為不明
12	2.5	0.6×0.7	1.45×1.5	28	5.7	0.5×0.55	欠損の為不明
13	2.9	0.7×0.8	1.6×1.5	29	3.0	0.45×0.45	欠損の為不明
14	3.2	0.5×0.7	1.6×1.4	30	1.9	0.4×0.5	欠損の為不明
15	6.4	0.6×0.45	1.2×1.2	31	4.7	0.3×1.6	—
16	8.1	0.4×0.3	1.2×1.1				

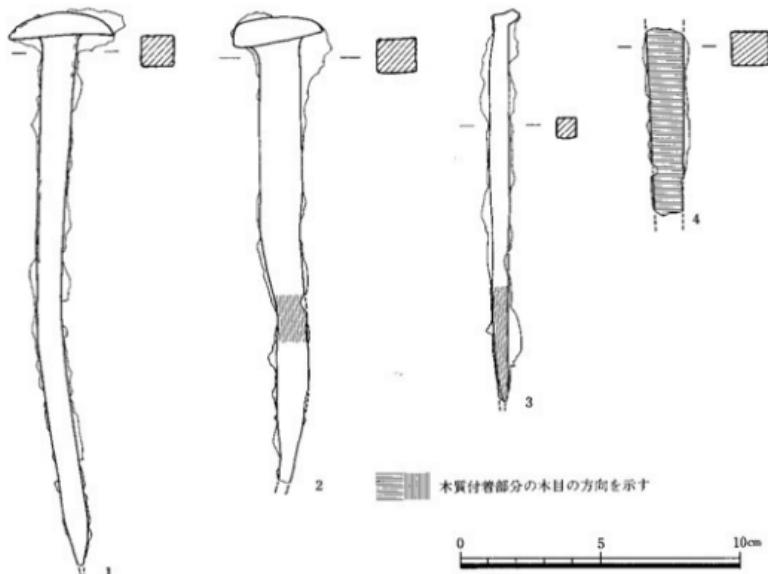


図-8 雁多尾煙6支群13号墳石室内出土鉄釘実測図

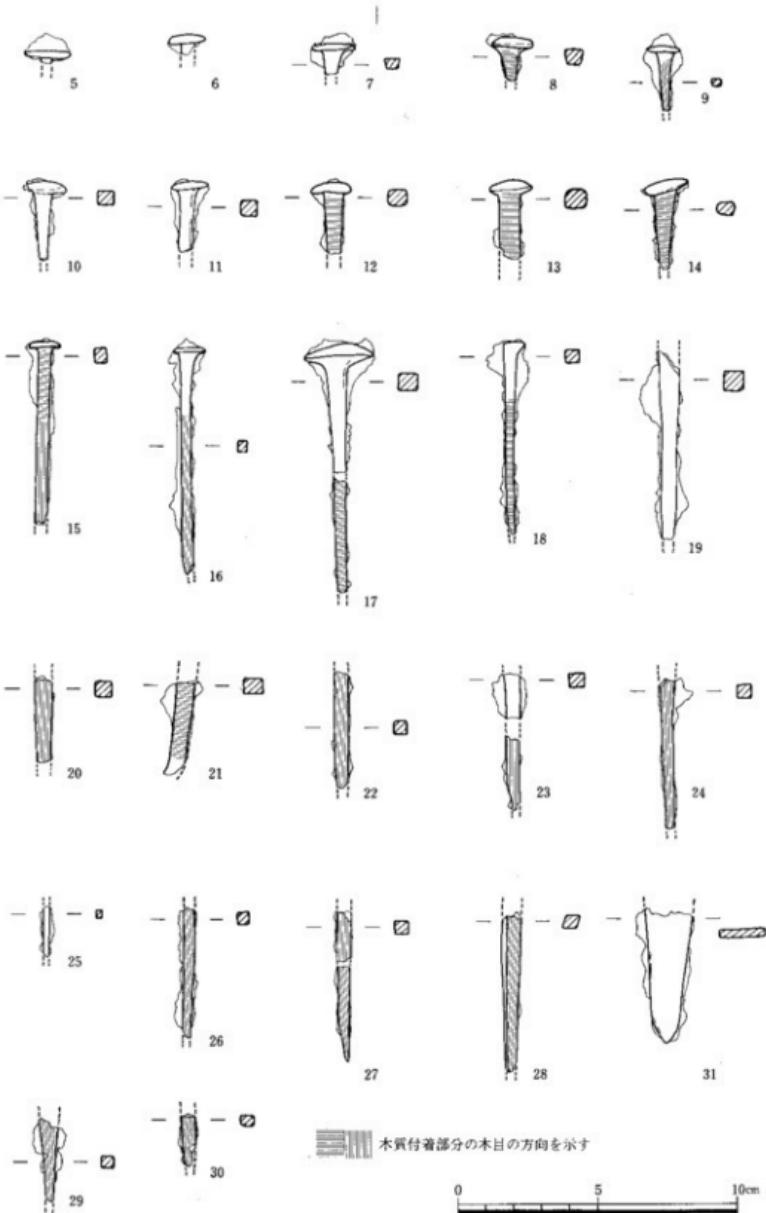


図-9 肥多尾6支群13号墳石室内出土鉄釘実測図

3. 鉄塔No.252の調査 (雁多尾畠17支群)

愛工社の諸君の手により、予定地の樹木の伐採及びボーリング調査を実施した。下草、樹木を伐採した時点で、A脚予定地点において、古墳（雁多尾畠17支群1号墳）の墳丘の存在が明確となつたため、関西電力株式会社用地課では、即座に当初計画を変更し、全体を10m、No.253の方にずらすことになった。このため、調査位置が変わることとなった。各脚部にトレーンチを設定し、発掘調査を実施した。いずれも、自然堆積の表土層の下層には古く遡る造構、遺物の存在は認められず、わずかにD脚建設予定地点で近代にかかる焚火跡の焼土部分が認められるにすぎなかった。

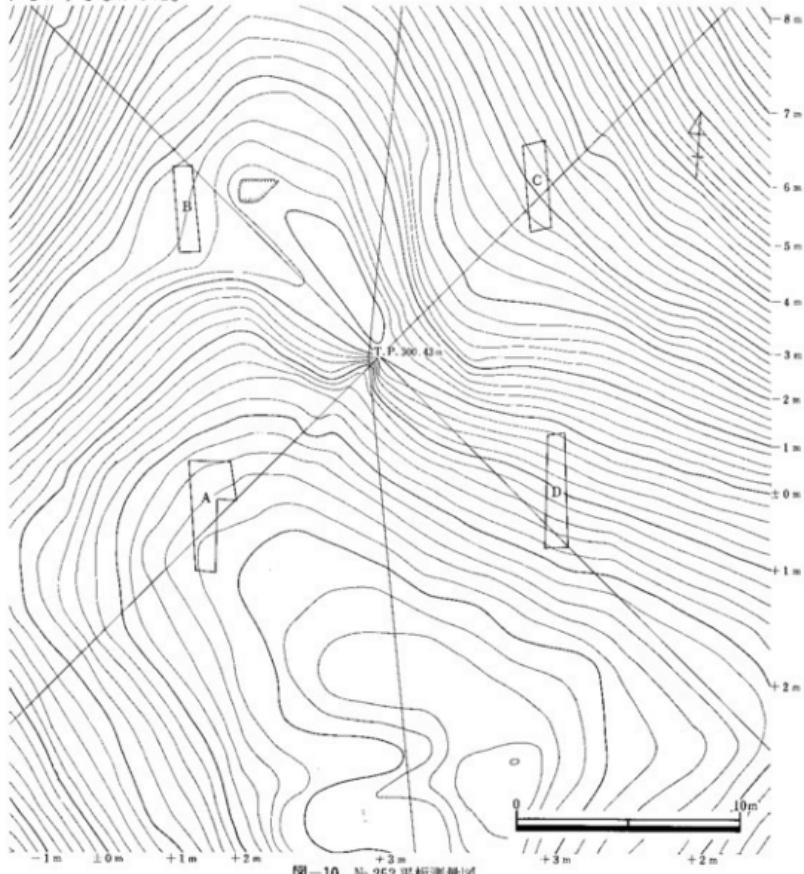


図-10 No.252 平板測量図

4. 鉄塔No.251の調査 (雁多尾畠43支群)

当該予定地は尾根の最高所（標高269m）に位置し、当然のことながら、古墳の存在が予測された。樹木及び籠の伐採後の地形観察からは尾根の最高所に占地する前方後円墳と考えられた。調査は、A～Dの支脚建設部に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。Bトレンチからおちこみ状の遺構の存在が確認されたので、南東部にB'トレンチを拡張した。B'トレンチからはトレンチを横切る溝状造構（溝-1）が検出された。墳頂と考えられる尾根の最高所に、幅1m、長さ14.5mのEトレンチを設定した。遺構として、溝-2、土壌-1、溝-3が検出された。土壌-1を確認するため、F、F'トレンチを設定し、土壌-1の規模、性格、時期の確認に努めた。土壌-1が 2×1.6 mの平面階円形を呈する深さ1mのものであることを確認した。溝-2の延長部を探査するためにFトレンチから北に幅1m、長さ4mのトレンチを拡張した。このトレンチから溝-4が検出された。土壌-1を取開むように溝-2、溝-3、溝-4が各トレンチ内で、弧状に検出されたので、土壌-1を主体部とし、周濠をめぐらす古墳を想定しえる。土壌及び周濠内から古墳の時期を推定する遺物は何ら出土していない。

Eトレンチ北側に東西方向にG、Hトレンチを設定した。当該予定地の最頂部に小石室の大井石かと考えられる石が露出していたので設定してみた。直径2.5mを計測する深さ5cmの土壌-2が検出された。土壌内からは遺物の出土は全く認められなかった。

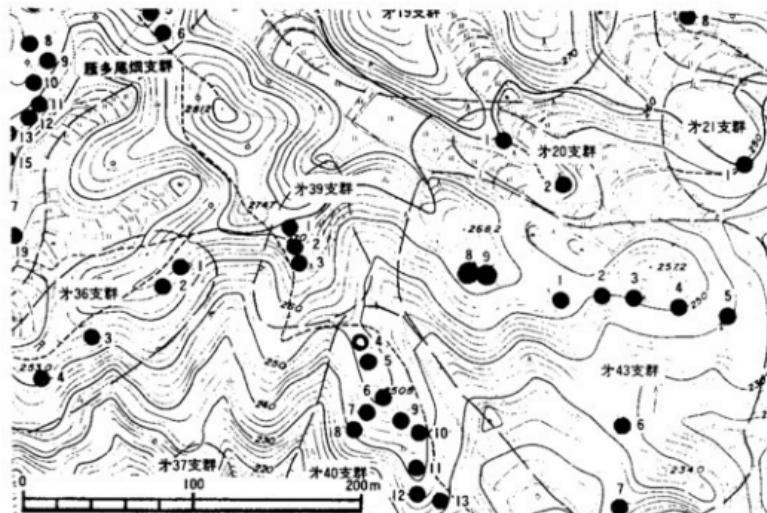


図-11 雁多尾畠43支群8・9号墳位置図（註文献より）

以上の調査結果からみて、当初予想していた前方後円墳又は円墳であることの確定的証左としての遺構及び遺物が把握できなかつたので、鉄塔建設を可とした。しかし、確定的でなくとも、古墳を示唆する周濠状遺構の存在は解明しなくてはならない問題として資料にとどめ、将来に近似資料の蓄積を待つて、その性格を検討し、解明したいと考える。

今回の調査地から南東にNo.250号鉄塔が予定され、測量のためNo.250号鉄塔建設予定地に向つて直線的に樹木の伐採がおこなわれていた。これに沿つて、尾根を下り、古墳の分布調査を試みたところ、墳丘状マウンドの存在が知られたので、墳丘の規模等の確認のため、草刈りをして、墳丘測量を実施した。その結果、2基の古墳が存在することを確認した。

1974年の大阪府教育委員会による平尾山古墳群分布調査によると、当該地は雁多尾畠支群第43支群に含まれる。第43支群は、今回の調査地から東へ派生する尾根の南斜面に7基の古墳が報告されており、これらの古墳と一連のものと判断してよいだろう。

新発見の2基の古墳は、地形観察から両基とも円墳と考えられる。標高は263～266m。西側の8号墳は墳丘推定直径8m、横穴式石室の天井石の一部と思われる石が2個残頭している。東側の9号墳は墳丘推定直径6m、中央に浅い凹地が認められる。凹地は自然地形とは考えられず、横穴式石室の一部が崩壊しているのではないかと考えられる。これが、古墳と判断させる根拠となった。両古墳は規模がやや異なるが、非常に近接しており、築造時期は近いのではないだろうか。また、墳丘はやや崩壊しているが、石室は比較的良好な状態で残っているのではないかと思われる。

(1) 田代克己『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府教育委員会 1975

なお、図版十六分布図に当支群が第42支群とされているが、第43支群の誤りであろう。

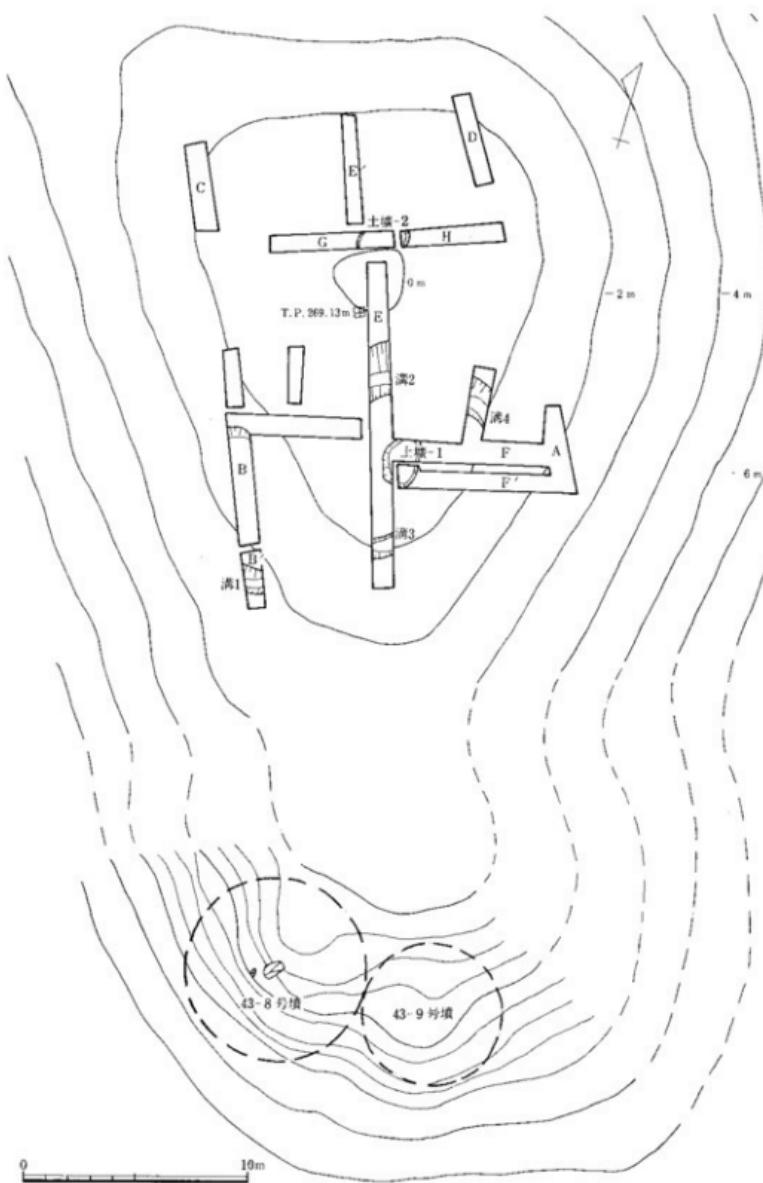


図-12 鉄塔No.251附近43号墳群8・9号墳測量図

5. 鉄塔No. 250 の調査 (雁多尾畠45支群)

関西電力鉄塔No. 250 建設に伴う緊急発掘調査。当該地は、現在ぶどう畠となっており、南へ派生する尾根の稜線上に位置する。過去に古墳の存在が確認されていないが、1974年の大阪府教育委員会の分布調査によると平尾山古墳群雁多尾畠支群第45支群内に含まれる。第45支群では、これまでに2基の古墳が確認されている。標高は227 m前後である。⁽¹⁾

調査は、まず脚四箇所のうち、南斜面上の三箇所と、古墳の存在が予想された中央に一箇所のトレンチを設定して実施した。その結果、第1・2トレンチは、いずれも地表面から20cm前後の深さで地山が検出され、造構・遺物は認められなかった。また、第4トレンチにおいて、現地形が古墳状をなすのは、地山が急傾斜を示し、擾乱を受けているためであり、やはり造構・遺物は認められなかった。しかし、第3トレンチで溝が発見され、その溝が弧状をなすことから、古墳の周溝である可能性が考えられた。そのため、第3トレンチを北に拡張し、その東側に第5トレンチを設定し、溝が半円状に巡っていることを確認、古墳の周溝であることは間違いないと考えられた。そこで、主体部を検出するため第6トレンチを設定し、さらに第3トレンチを東へ拡張することにした。その結果、第3トレンチ拡張部から横穴式石室が確認された。なお、本古墳は雁多尾畠45支群3号墳とした。

横穴式石室は、奥壁、および側壁の一部が二段を残すのみであり、過去にかなりの石が抜き取られている。石室主軸は磁北より約5°西へ振っている。石室の規模は、現存長約380 cm、幅約115 cm、現存高約140 cmである。石室入口近くの石は大部分が持ち去られており、かなり削平されているため、本来の長さは確認できなかった。しかし、平尾山古墳群内の同規模の古墳から類推すると、石室長が400 cm前後の無袖式石室と考えられる。石材は花崗岩の自然石であり、平坦面を石室内面に向けて組んでいる。奥壁は長さ約120 cmの横長の石を二段に整然と積んでいるが、側壁は比較的乱雜な積み方である。おそらく、奥壁を一石据えた後、側壁を奥から順に据え、二段目も同様に奥壁から積み上げたものと考えられる。天井については推定できないが、奥壁は二段のみで、その上に天井石が架構されていたものと考えられる。

石室床面は、奥壁近くでは地山に達し、それ以南は墳丘と同一の褐色土を叩きしめている。床面には棺台かと思える20~40cm大の花崗岩が数個存在したが、原位置を留めているとは考えられない。また、その周辺から鉄釘が多数出土しているが、やはり原位置を留めておらず、ほとんどが西壁近くで出土している。

墳丘封土は、完全に削平されており、現地形からは古墳の存在は予想もされなかった。地山上の硬くしまった褐色土が封土の一部であると考えられる。

周溝は幅0.6~2 m、深さ0.6 m以下、総長約16mまで確認できた。埋土は上層が淡黒褐色土、下層が暗黄褐色砂質土。遺物は全く認められなかった。周溝は古墳の上半部のみを半円状

に取り巻いている。しかし、周溝は正円をなさず、やや外開き気味になっている。これらのことから推察して、古墳築造時から、周溝は古墳上部にのみ存在したものと考えられる。この周溝の中心から古墳の規模を復元すると、南北11m、東西10mとなり、やや橢円形状を呈する。

遺物は盛土から鉄釘・土師器・須恵器片が出土しており、石室床面から鉄釘22・土師器皿1が出土した。鉄釘は良好な資料が少ないが、木目の残るもののが数本見られる。また、頭部が偏平な方形状をなすもの、折曲したものがあるが、使用箇所の差は不明である。

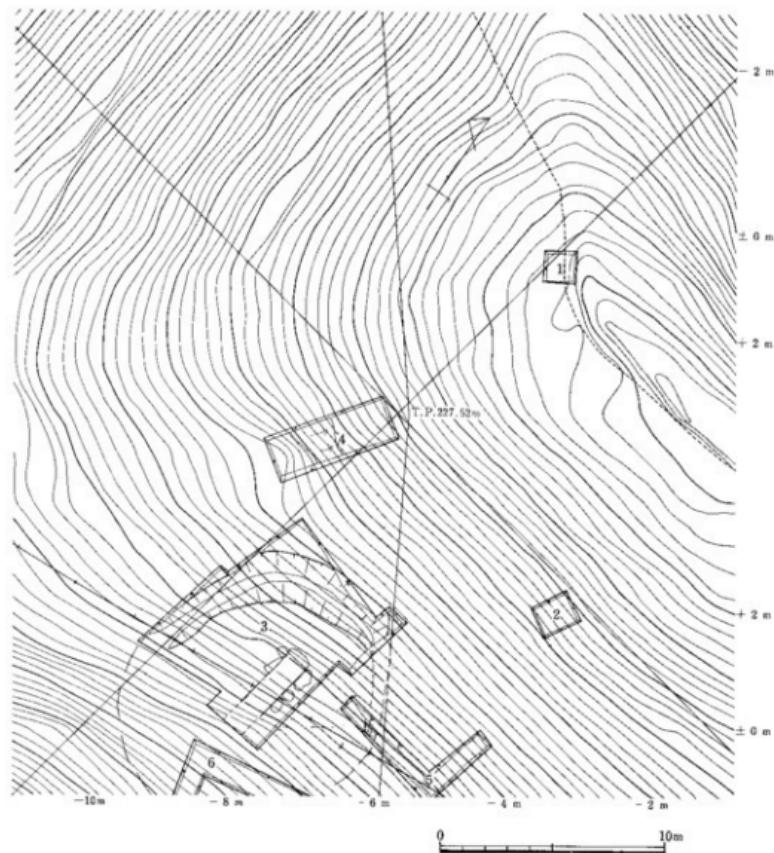


図-13 No.250 平板測量図

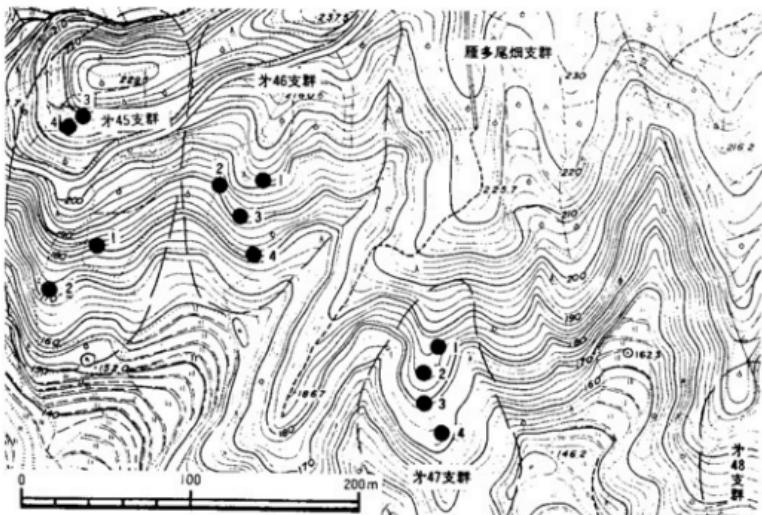


図-14 楠多尾畠45支群3・4号墳位置図（註文部より）

土師器杯は奥壁から1.82mの東壁際で出土。推定口径約13cm、深さ約7cm。内面および外面上半は横ナデ、外面下半はナデ調整。内面には放射状の暗文が見られる。土師器杯は破片ではあるが、ほぼ原位置を留めていると考えられ、木棺の南東、すなわち被葬者の左足元におかれていたと考えられる。石室内埋土から出土している須恵器片は、壺の破片と考えられ、土師器杯と同様に、やはり被葬者の足元におかれていたのであろう。

今回出土した遺物からは、絶対年代を決定できない。しかし、石室内の状況から、追葬の可能性は少なく、幅115cmの無袖式石室であることから、7世紀代と考えられる。

また、今回の調査範囲外であるが、45支群3号墳の南西に古墳状の高まりが見られ、巨石が露出している。これも古墳であることは間違いないと考えられ、この古墳を45支群4号墳とし、墳丘測量を実施した。その結果、直径13m前後の円墳であり、露出している巨石は石室の東壁であると考えられた。そして、巨石の並び方から、石室は磁北から約25°西に振っていると考えられる。現状から推察すると、石室は一部が破壊されているものの、かなり良好な状態で残っていることが予想される。45支群3号墳の石室埋土・盛土から現代の磁器が出土していることから、古墳の破壊はぶどう畠開墾に伴うものと考えられる。そして、石室に使用されていた石をぶどう畠の石垣に一部転用していると考えられる。また、ぶどう畠内の中道が両古墳の裾を通っていることも、ぶどう畠開墾時には両古墳の存在が意識されていたことを示しているものと思われる。

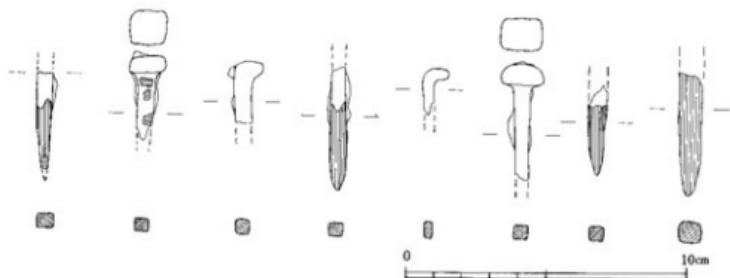


図-15 猥多尾畠45支群3号墳石室内出土鉄釘実測図

大阪府教育委員会の調査によると、45支群1号墳は玄室幅120cm、南に開口する横穴式石室を有する円墳。封土は流失し、石室は半壊している。45支群2号墳は玄室長310cm、幅240cm、高さ200cm、羨道長420cm、幅147cm、南々東に開口する両袖式の横穴式石室を有する直径13.5m、高さ2mの円墳。封土・石室は完存している。

今回の調査で確認できた二基の古墳は、45支群1・2号墳と同一の尾根上に位置する。各古墳の時期は異なるようであるが、同一の支群と考えてよいであろう。尾根は、現在、道路によって切断されているが、周辺に石室材とも考えられる巨石が石垣などに使用されており、かつては四基以上の古墳が存在したと考えられる。

関西電力との協議の結果、鉄塔の位置を変更することは不可能であるということであり、45支群3号墳の墳丘西縁および同溝の一部が鉄塔建設によって破壊されることになった。完全保存できなかったのは残念であるが、石室を中心とするその他の部分に影響が及ばないように、埋め戻しを実施し、工事に際して、45支群3号墳上に立ち入らないように申し入れ、できる限り保存できるように努めた。

註

- (1) 田代克己『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府教育委員会 1975

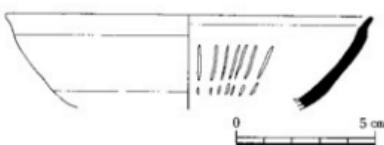
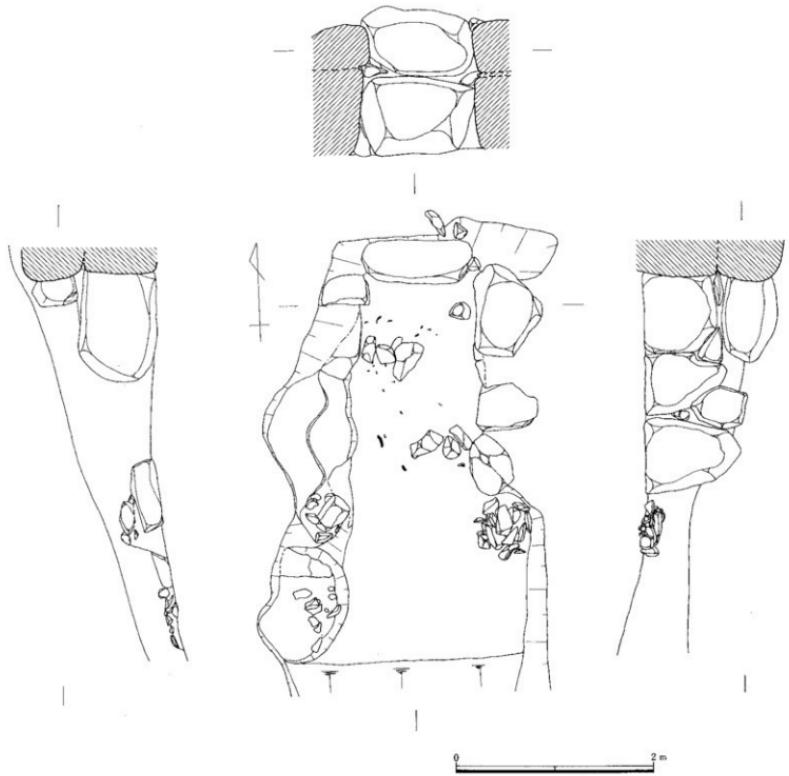


図-16 猥多尾畠45支群3号墳石室内出土土器実測図



圖一十七 楊多尾窯45支群3號橫穴式石室素面圖

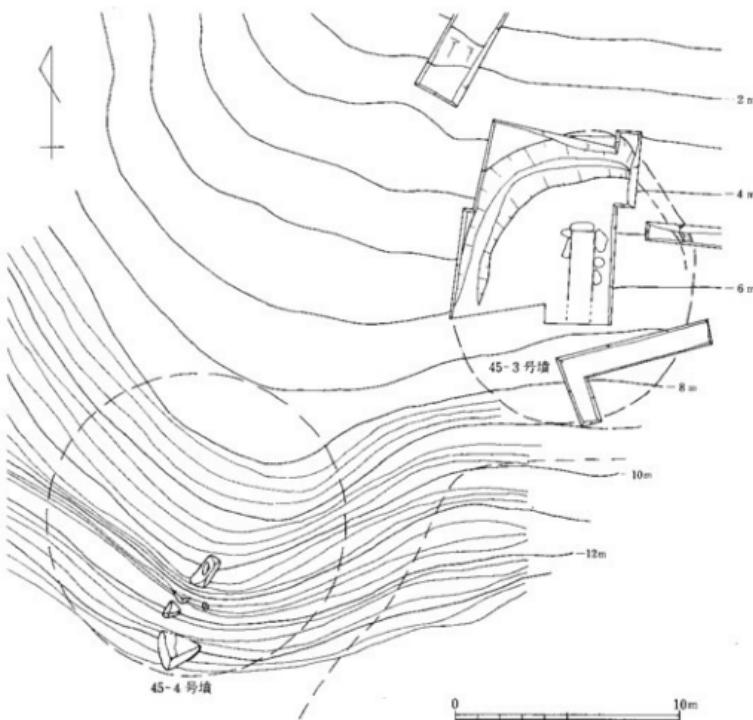
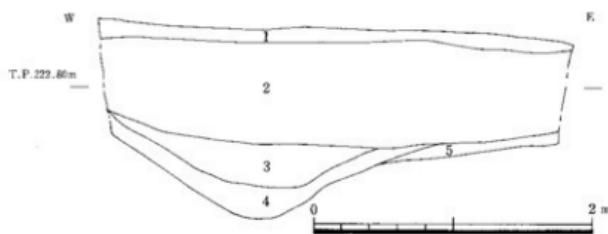


図-18 雅多尾畠45支群3・4号堤測量図（基準高=T.P.227.52m）



①表土 ②淡褐色土 ③淡黒褐色土 ④暗黃褐色砂質土 ⑤褐色土

図-19 雅多尾畠45支群3号堤周溝断面図

6. 鉄塔No. 249 の調査 (雁多尾畠48支群)

関西電力鉄塔No.249 建設に伴う緊急発掘調査であり、当該地は平尾山古墳群雁多尾畠48支群に含まれる。

調査地は、標高 160m 前後、南へ伸びる尾根の先端部に当たり、古墳の存在が予想された。そこで、6本のトレンチによって発掘調査を実施したが、遺物包含層・遺構は全く認められず、古墳が存在しないことが確認された。盛土は灰褐色粘質土、地山は花崗岩質赤褐色粗砂である。

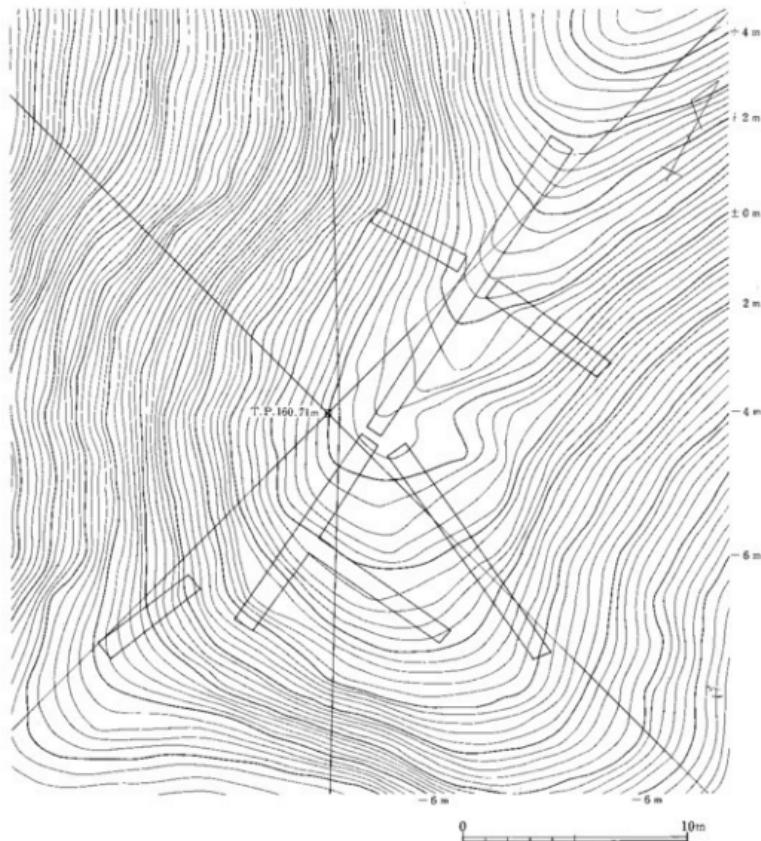


図-20 No.249 平板測量図

7. 鉄塔No 248 の調査 (青谷支群)

関西電力鉄塔No 248 建設に伴う緊急発掘調査であり、当該地は平尾山古墳群青谷支群に含まれる。

調査地は東から西へ張り出す尾根の西、及び南斜面に当たる。周辺には、ほとんど古墳が認められないが、地形からその存在の可能性が考えられた。標高は 114 m 前後である。

調査は 3 本の主トレント、及び数本の枝トレントによって実施した。その結果、遺物は全く発見されなかったが、土壌 4 、溝 3 を確認した。地山は標高の高い地点で表土下約 10cm で確認され、標高が低くなり、傾斜が急になるにつれて深くなり、表土下約 60cm となる。地山は赤褐色粘質土、または赤褐色粗砂。鉄分を含んでいるためか、非常に赤っぽく見える。地山と表土の間には淡褐色土の盛土が一層見られるのみである。

土壌 - 1 は、 330 cm × 110 cm の長楕円形状を呈し、深さ 25cm 、埋土は赤褐色粘質土・褐色砂質土であり、一見焼土を思わせた。しかし、埋土中に炭等は認められず、地山が全体に赤褐色である点から、焼土とは考えられない。

土壌 - 2 は、 230 cm × 90cm の長楕円形状を呈し、深さ 35cm 、埋土は淡赤褐色粘質土・黄緑色砂質土である。

土壌 - 3 は、直徑 100 cm の円形状を呈し、深さ 18cm 、埋土は黄褐色土である。

土壌 - 4 は、長さ 180 cm であり、円形状を呈すると思えるが、トレントの壁際であり、半掘で留めた。深さ 18cm 、埋土は黄褐色土である。

溝 - 1 は、長さ 260 cm 以上、幅 65cm 、埋土は黄褐色土である。

溝 - 2 は、長さ 130 cm 以上、幅 120 cm 、深さ 17cm 、埋土は黄褐色土である。

溝 - 3 は、長さ 160 cm 以上、幅 70cm 、深さ 18cm 、埋土は黄褐色土である。

溝 3 条は、いずれも斜面地の高い側をカットし、底面を平坦にしたものである。埋土から考えても、水を流すことを目的としたものとは考えられず、道状の遺構を考えるほうが妥当であるかもしれない。特に、溝 - 2 ・ 3 は弧状につながる可能性が考えられたため、円墳の周溝になるのではないかと考え、トレントを拡張したが、古墳の存在を示す遺構・遺物は認められなかった。また、不規則な方向、配置から考えて、実際に道として使用されたとも考え難い。

土壌についても、やはり遺物が発見されておらず、形状も不規則であり、性格不明と言わざるを得ない。

以上のように、遺構は検出されたのであるが、遺物が全く出土しておらず、遺構の時期・性格等を明らかにすることはできなかった。

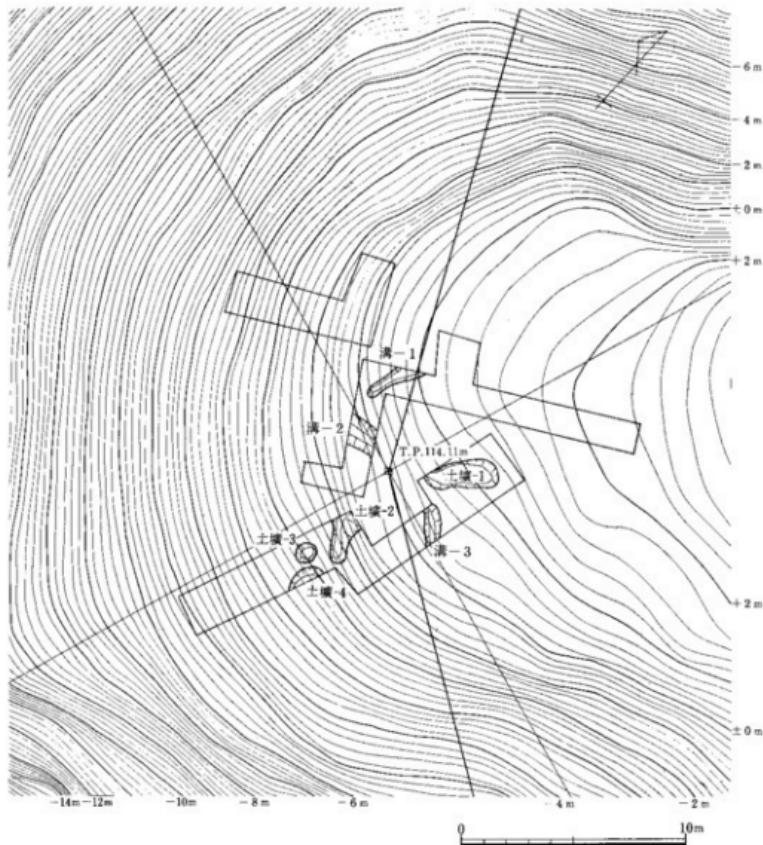


图-21 No.248 平板测量图

8. 鉄塔No.247の調査（青谷支群）

関西電力鉄塔No.247建設に伴う緊急発掘調査であり、当該地は平尾山古墳群青谷支群に含まれ、現状はぶどう畑である。

調査地は、標高84m前後、南東方向に張り出す尾根上に位置する。調査は、鉄塔の脚四ヶ所のうち、遺構の存在する可能性があると考えられた尾根稜線近くの二ヶ所に3本のトレンチを設定して実施した。

各トレンチでは、地表面から20~40cmの深さで、表土直下に花崗岩質の地山が確認され、ぶどう畑に伴うと考えられる攪乱数ヶ所以外は、遺構・遺物共に全く認められなかった。

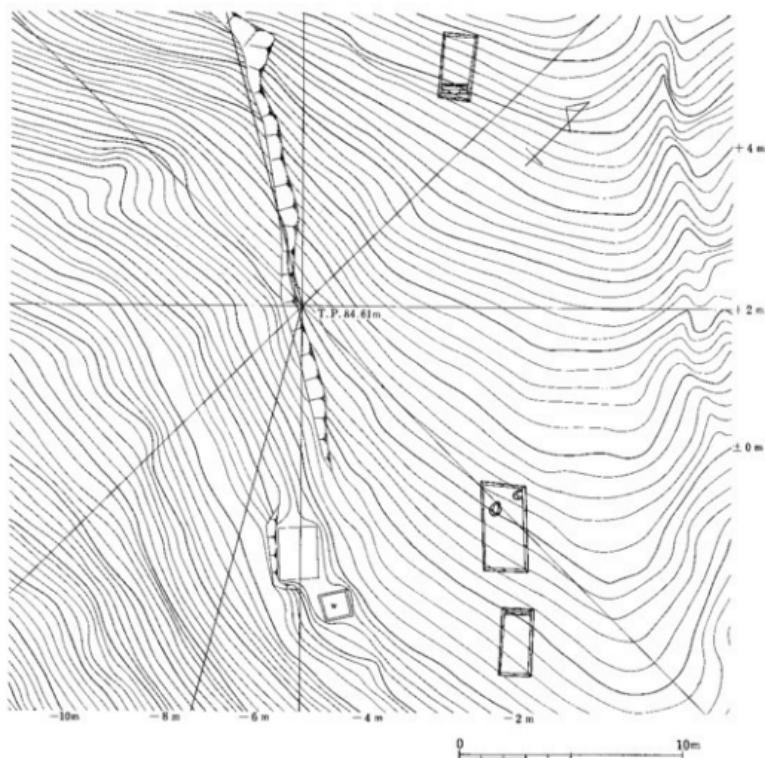


図-22 No.247 平板測量図

ま　　と　　め

大阪府と奈良県との県境として、南北に連なり、北端を淀川で、南端を大和川で終息する生駒山地の西麓には古墳群が点々と存する。なかでも、南端部に位置する柏原市域の東山地区は山間にも及び、千数百基の古墳が存在しており、この大古墳群を平尾山古墳群と総称し、分布のあり方により、八支群にわけている。これは1974年度の『平尾山古墳分布調査概要』、大阪府教育委員会、にしたがったものであるが、旧くは「平尾山千塚」、道明寺山千塚等と古墳の分布が集中している地区の小字名を冠していた。

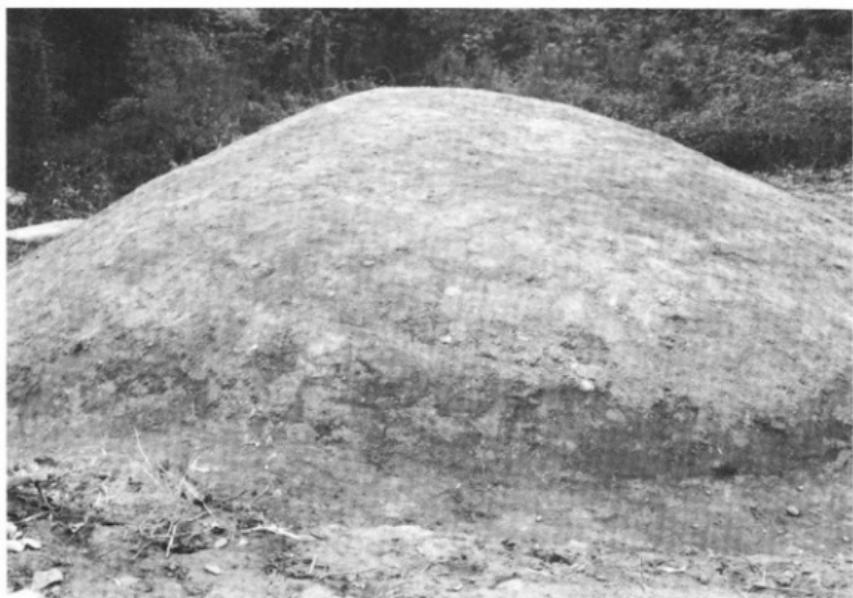
平尾山古墳群に関し、先学による研究の実蹟が存し、色々と貴重な指摘がなされている。

今回の調査結果の一つに、雁多尾畠45支群3号墳として発見された古墳は、ブドウ畠の開墾の際、墳丘封土は完全に削平されており、石室材も搬去されて、わずかに石室の基底部のみが遺存するものであった。現地形にもとづく現地踏査を主体とする分布調査では発見しえないものである。近時、柏原市内では発掘調査による古墳の発見例が増加していることから、分布調査の方法について見直す必要があるよう考へる。

今回の発掘調査の結果、関西電力の送電用鉄塔建設予定地に、古墳や古墳に関する遺構の存在が知られたのは、№253、№252、№251 №250の4地点であった。

関西電力株式会社は調査結果をもとに、各予定地で、設計変更や建設位置の移動等によって、遺跡保存に極力努められた。このため古墳をとりまく自然環境の変化はやむえないとしても、古墳自体は破壊をまぬかれたことは埋蔵文化財保護をわずかでも進めたものと考える。

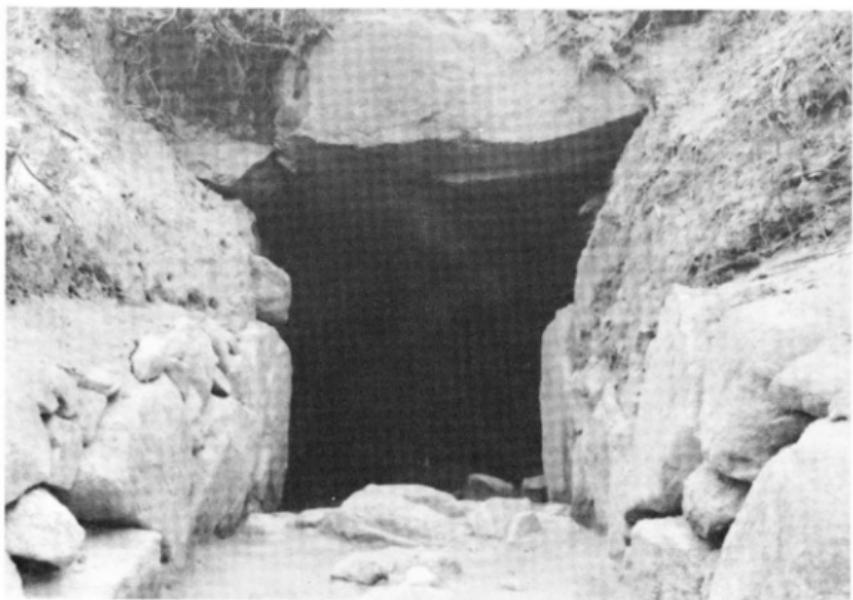
図 版



雁多尾烟6支群13号墳墳丘復元状况（上・下）



雁多尾烟6支群13号墳横穴式石室排水溝



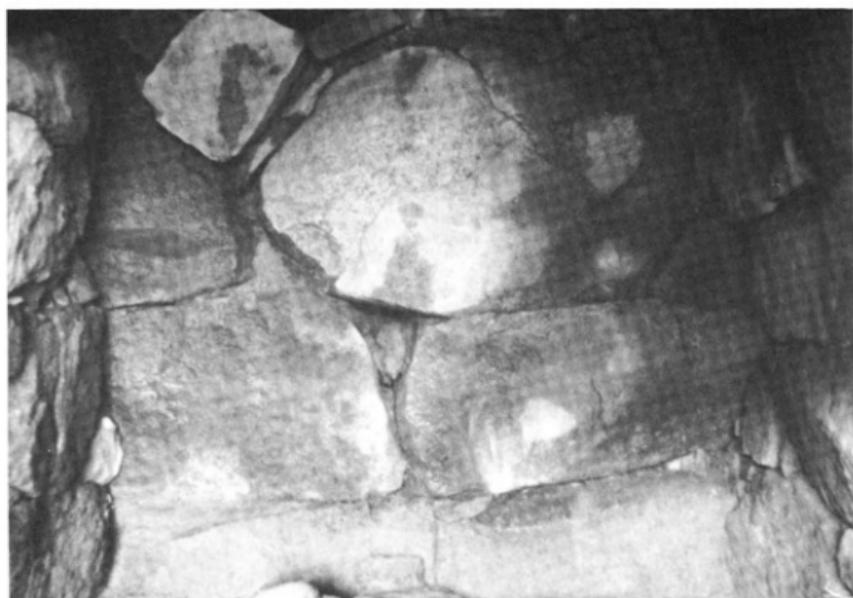
雁多尾烟6支群13号墳横穴式石室入口



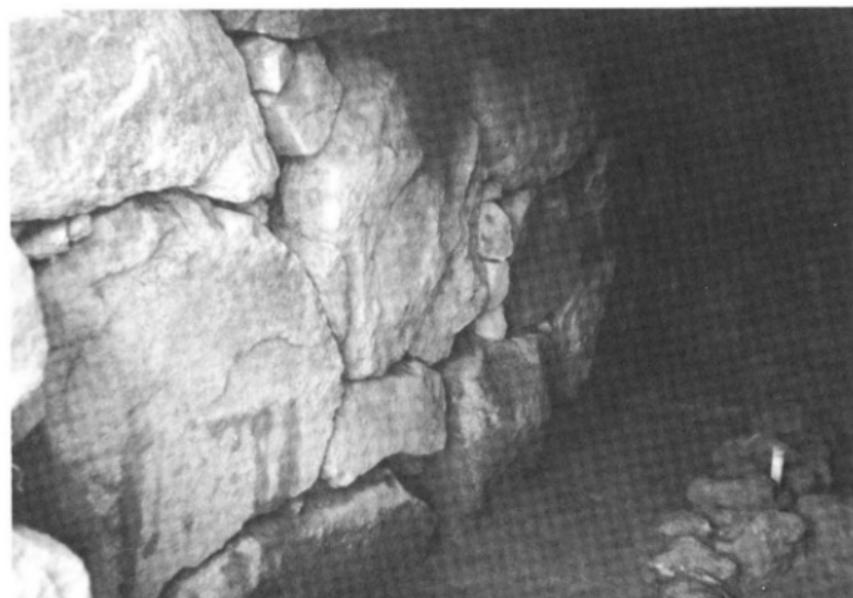
雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内



雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内



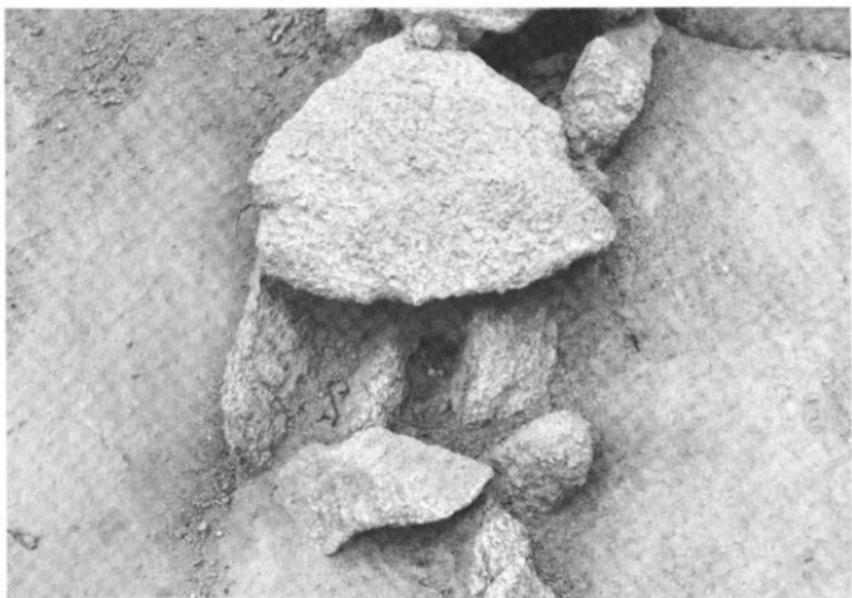
雁多尾烟6支群13号填横穴式石室奥壁



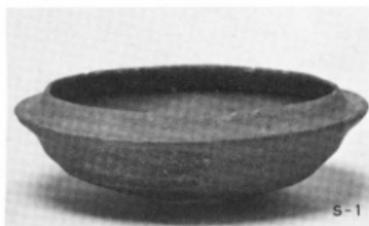
雁多尾烟6支群13号填横穴式石室西壁



雁多尾畠6支群13号墳石室内遺物出土状況



雁多尾畠6支群13号墳石室内排水溝



S-1



S-2



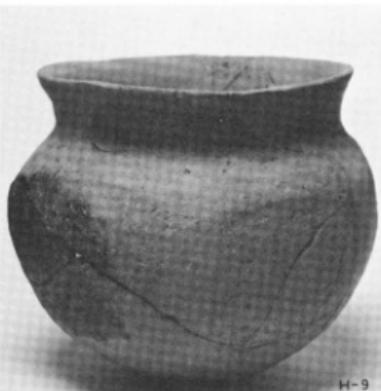
S-3



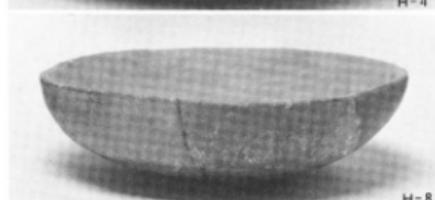
雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内出土須恵器、かんざし、D脚落ち込み内出土馬具紋具・刀子



H-2



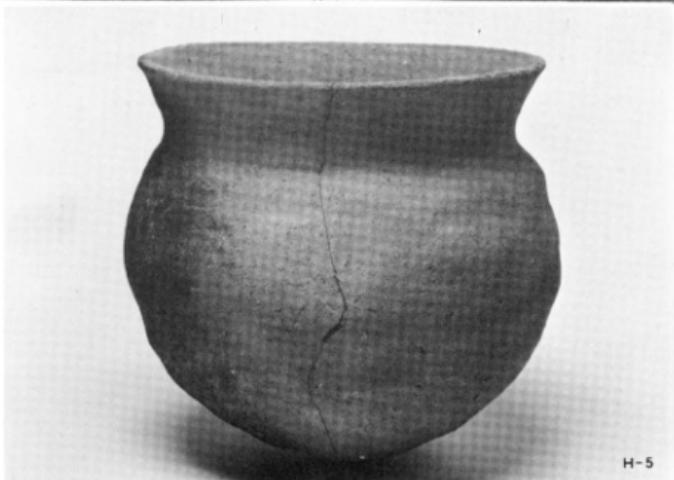
H-9



H-8



H-10



H-5

出土土器



羅多尾細6支群13号墳石室內出土鐵釘



雁多尾畠6支群13号墳横穴式石室内出土鉄釘、鎌



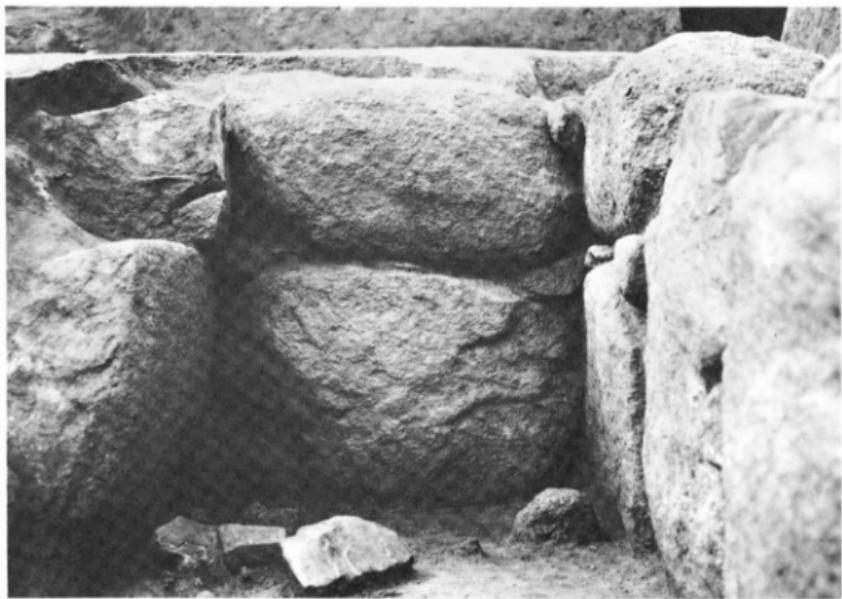
雁多尾細45支群3号墳全貌（北西から）



雁多尾細45支群3号墳埋め戻し状況



雁多尾烟45支群3号填横穴式石室



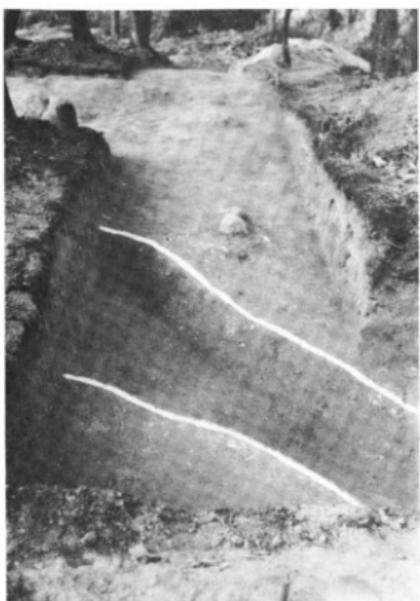
雁多尾烟45支群3号填横穴式石室奥壁



雁多尾畠45支群3号墳横穴式石室東壁



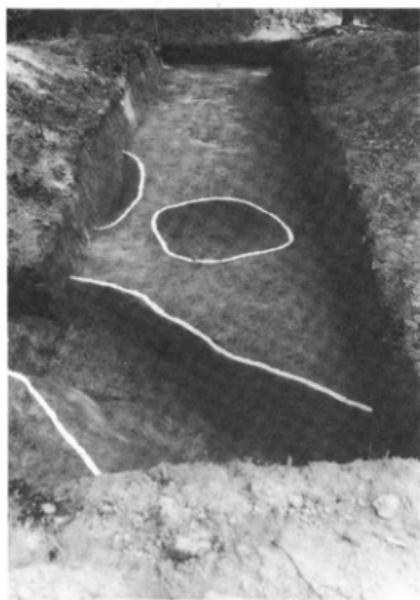
雁多尾畠45支群3号墳周溝



溝-1



溝-1・2



土壤2・3・4



東西トレンチ掘り下げ状況

平尾山古墳群
—関西電力御坊幹線鉄塔建設工事に伴う—

編集・発行 柏原市教育委員会

〒532 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729)72-1501 内716

発行年月日 昭和58年3月31日

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

